

要 旨

本研究は、目的や意図に応じて事実や意見を適切に表現する力を育成するために、相手に効果的に伝わる文章構成について考える力を付ける学習指導の在り方を探ったものである。同じ材料を用い、相手と形式を変えて2種類の報告文を書かせることにより、構成についての意識を高めた。また、「学び合いシート」を用い、構成を意識させた意見交流を清書前に取り入れた。その結果、生徒は文章を読んだり書いたりする際に、構成について意識することができるようになってきた。そして、伝えたいことを効果的に伝えるための構成について考える力が付いてきた。

〈キーワード〉 ①表現する力 ②報告文の再構成 ③意見交流

1 研究の目標

目的や意図に応じて事実や意見を適切に表現する力を育成するために、的確な構成で文章を書かせる指導の在り方を探る。

2 目標設定の趣旨

学習指導要領では、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる」¹⁾ことを中学校国語科の目標としている。また、学習指導要領国語科改訂の経緯では、PISA調査など各種の調査から、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題が見られるとしており、一人一人の生徒が言語の主體的な使い手として、相手、目的や意図、多様な場面や状況に応じて適切に表現したり正確に理解したりする言語能力を確実に身に付けることが求められている。

平成25年度全国学力・学習状況調査の報告においては、当該学年の「書くこと」についての評価の観点が「おおむね達成」の基準を下回っており、提示された条件を満たして適切に表現することに課題が見られた。

目的や意図に応じて適切に表現する力を育成するためには、文章を的確に構成する力を育成することが必要である。構成力が求められる文に報告文がある。報告文は、見聞きしたこと、観察したこと、調査や研究したことなどの結果を、記録に基づいて、相手に対して正確に、よく分かるように知らせるために書く文章である。報告文を書く際には、自分が伝えたいと思う事実や意見と、相手が最も知りたいと思う内容を考え、材料を整理して構成を考える必要がある。

そこで、本研究では、研究テーマ、研究課題を受け、事実や意見などが相手に効果的に伝わるように、的確な構成で報告文を書く力を育成する指導の在り方を探る。段落の役割を意識して書くことで、伝えたいことを適切に表現する力が育成できると考えた。また、同じ出来事についての報告文を、相手や形式を変えて再構成して書くことで、構成を考えて効果的に伝える力が身に付くと考え、本目標を設定し、研究を進めることとした。

3 研究の仮説

「書くこと」の指導において、相手と形式を変え、再構成することにより、効果的に伝わる構成で報告文を書く力を育成することができるであろう。

4 研究方法

- (1) 報告文や文章構成に関する理論研究
- (2) 国語の学習全体や「書くこと」に関する生徒の実態調査
- (3) 文章構成を示して報告文を書かせる授業実践及び考察

5 研究内容

- (1) 目的や相手を明示し、様々な形式で報告文を書かせる指導法の研究を基に、求める文章構成力について明らかにする。
- (2) 質問紙や生徒作品の分析による実態調査を実施し、授業実践時の工夫の観点を明らかにする。
- (3) 所属校の1年生における単元「報告文を書く」、教材名「調べたことを報告しよう レポートにまとめる(光村図書)」(3時間)と「案内や報告の文章を書こう(東京書籍)」(3時間)を用いた授業実践を行い、仮説を検証し手立ての有効性を示す。

6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

中学校学習指導要領解説国語編には、国語の能力の根幹となる言語能力を、社会生活に生きて働くよう、一人一人の生徒が言語の主體的な使い手として、相手、目的や意図、多様な場面や状況などに応じて適切に表現したり正確に理解したりする力として育成することが大切であると述べてある。「書くこと」の学習について、花田は「書く目的や相手を意識し、どんな情報をどのような構成でわかりやすく叙述するかという学習を展開する必要がある」²⁾と述べている。また、書く目的や相手を意識することについて、森岡は「主題に関する知識が読み手にあるかどうかによって、含める材料も、また組み立ても変えていかなければならない」³⁾と述べている。これらを受け、文章を書くときには、「相手を意識した構成」が必要であると考えた。

学習指導要領の「B書くこと」の「構成に関する指導事項」において、第1学年の教科書単元の評価基準を整理して構成に関する力についてまとめた(表1)。第1学年の構成について求められる力は、主に「段落分け」、「段落構成」、「形式に応じた構成」であると示されている。

表1 教科書単元の評価基準と構成に関する力(東京書籍 平成23年度版)

学年	学習指導要領 構成に関する指導事項	評価基準	単元名	構成力
第一学年	集めた材料を分類するなどして整理するとともに、段落の役割を考えて文章を構成すること。	・材料を分類して見出しを付けるなどして整理し、分かりやすい <u>段落構成</u> や図表を考えて説明文を書いている。	【伝達】 図表を使って伝えよう —「私」の説明文	段落構成
		・文章やメモから必要な文章を選び出し、掲載媒体の <u>形式に応じて分かりやすい構成</u> でまとめている。	【通信・手紙】 案内や報告の文章を書こう	形式に応じた構成
		・作品の良さを伝えるために材料を集めて整理し、内容のまとまりごとに <u>段落を分けて</u> 鑑賞文を構成している。	【感性・創造】 鑑賞して良さを表現しよう —CDジャケット	段落分け

これらのことを踏まえ、本研究では、求める文章構成力を、事実や意見を相手や形式に応じて表現する力とし、「相手を意識した構成」、「形式に応じた構成」で書くことができる力と、伝えたいことを相手に効果的に伝える「段落構成」、「段落分け」ができる力の育成を目指す。

(2) 検証授業に向けて

ア 書く力(構成力)の整理

文献等による理論研究を基に、求められる構成力を、「段落分け」ができる力、「段落構成」ができる力、「形式に応じた構成」で書く力、「相手を意識した構成」で書く力であるとする。本研究では、「相手を意識した構成」と「形式に応じた構成」に着目して研究を進める。相手と形式を変えて報告文を書き換える活動を行い、「相手を意識した構成」や「形式に応じた構成」を取り扱う中で、「段落構成」や「段落分け」についての意識も高まり、文章構成の力が身に付くと考えた。

イ 生徒の実態

生徒がこれまでに書いた意見文や説明文、読書感想文を見ると、材料の整理ができていないために、目的に応じた構成になっていない文章が多くあった。また、4月実施の佐賀県学習状況調査においては、提示された条件に合わせた構成、特に段落分けができていないことで誤答となっているものが多かった。12月実施の佐賀県学習状況調査においては、短答式の段落分けの設問において、県全体の正答率38.5%であったのに対し、当該学級の正答率は51.9%(14名)と、13.4%上回っていた。11月の検証授業の際に、段落を意識してレポート形式で報告文を書く活動を行っていたことが、今回の正答率につながったとも考えられる。しかし、無解答者はいなかったものの、段落についての意識が低い生徒が48.1%(13名)いることが分かった。

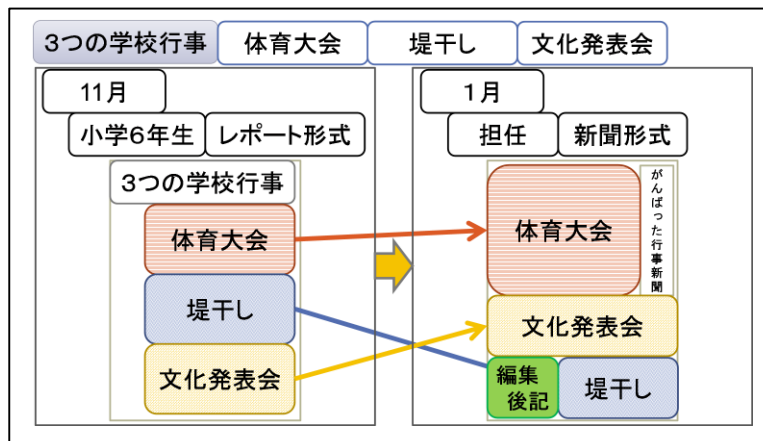
(3) 検証授業について

仮説の検証に当たり、1月に、単元「報告文を書く」、教材名「案内や報告の文章を書こう(東京書籍)」を検証授業として行った。

ア 単元の概要

本単元は、学習指導要領第1学年「書くこと」の指導事項イ「集めた材料を分類するなどして整理するとともに、段落の役割を考えて文章を構成する」能力の育成をねらいとする。

生徒は11月に「調べたことを報告しよう レポートにまとめる(光村図書)」で、これまでに体験した3つの学校行事、「体育大会」、「堤干し」、「文化発表会」について、中学校のことをあまり知らない小学6年生への学校紹介として、レポート形式で報告文を書いている。本単元では、相手が変わることによって、自分が伝えたい内容と相手が知りたいことが変わること留意して、同じ3つの学校行事について、行事内容をよく知っている同校の教師(元担任)に向けて、新聞形式で書き換えさせる(資料1)。



資料1 報告文の再構成について

第一次では、新聞の構成について振り返った後、本単元で作成する新聞の最終的な形態を提示する。中学校の行事についてよく知っている相手が、更に読みたいと思える内容になるように、記事の順序を考えさせ、それぞれの記事の見出し案を考えさせる。第二次では、記事の順序通りに見出し案を書かせ、新聞で伝えたいことと、見出しや記事の順序が関連しているかなど、構成について留意して、「学び合いシート」を用いて意見交流を行わせる。交流で得た意見を参考に構成を再考させ、記事の下書きをさせる。第三次では、トップ記事のリード文を書かせる。新聞名を決定させ、

編集後記を書かせる。単元全体を通して、相手と形式を変更して報告文を書き換える学習であることを意識させる。

イ 検証の視点

次の2つについて、手立ての有効性を分析し、考察していく。

【検証の視点Ⅰ】

レポート形式で書いた報告文を、相手と形式を変えて再構成することにより、的確な構成についての意識が高まったか

【検証の視点Ⅱ】

「学び合いシート」を用いて、清書前に意見交流をすることにより、新聞の構成について再考し、相手に効果的に伝わる紙面を作ることができたか

ウ 具体的な手立て

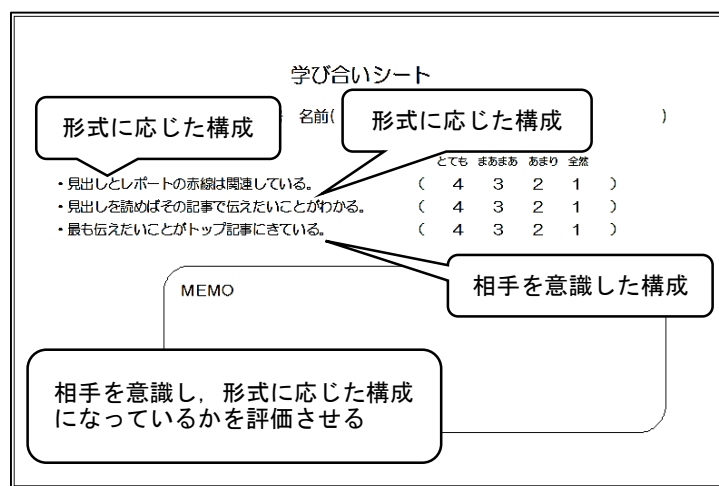
(ア) 相手と形式を変えた報告文の再構成

相手と形式を変更して報告文を再構成させることを、より意識させるため、相手と形式を黒板に明示し、伝える相手は学校行事をよく知っている同校の教師(元担任)であることを確認した。また、活動の見通しをもたせるために、教師が授業の流れを新聞形式で示したプリントを配布した。

(イ) 「学び合いシート」を用いた意見交流活動

意見交流活動には「学び合いシート」を用いた(資料2)。書くことにより、伝える側は意見や感想を確実に相手に伝えられ、伝えられた側は得た意見を読み返すことができるため、構成の再考がしやすくなると考えた。

構成を意識した意見交流となるように、相手を意識し、形式に応じた構成になっているかを評価させるようにした。清書前に交流することにより、得た意見をすぐに構成に生かすことができると考えた。



資料2 「学び合いシート」

(4) 研究の考察

ア 【検証の視点Ⅰ】 レポート形式で書いた報告文を、相手と形式を変えて再構成することにより、的確な構成についての意識が高まったか

授業後に行った意識調査と、レポート形式から書き換えられた新聞形式の報告文を基に考察を行う。

意識調査は、授業を受けた27名を対象に、新聞形式の報告文を書く際に気を付けたことを記述式で回答させた。回答内容から、「相手」、「形式」のいずれかを意識したものと、読み手を意識して、文字を丁寧に書いたり、敬語で書いたりし

表2 授業後に行った意識調査の結果

問 新聞形式の報告文を書く際に気を付けたことは何ですか。	人数	%
相手を意識した	10	37.0
形式を意識した	6	22.2
表記を意識した	9	33.3
無回答	2	7.4

たと回答した「表記」を意識したものに分類し、「無回答」を含む4つに分けた(前頁表2)。「相手を意識した」生徒は37.0%(10名)、「形式を意識した」生徒は22.2%(6名)であり、「相手」と「形式」を意識した生徒は半数を超えていた。「表記を意識した」生徒は33.3%(9名)、「無回答」の生徒は7.4%(2名)であった。

(ア) 「相手を意識した構成」について

報告文を読む相手を、中学校のことをよく知らない者から、よく知っている者に変更したことから、よく知っている者でも読みたくなる工夫をしているかについて見ていく。

相手の知りたいことに合わせて、報告文を通して「伝えたいこと」を変更した生徒は51.9%(14名)、それに合わせて「行事の提示順」を変えた生徒は37.0%(10名)であった。同じ行事についても、相手の知りたいことを考えて、どの部分を詳しく報告するかなど、伝える「出来事を焦点化」した生徒は29.6%(8名)であった(表3)。同じ出来事を記事にした生徒で、読み手が知らないことを書く工夫として、そのときの会話を再現したり、時間の経過を追う形で記事を仕上げたりして、「臨場感を味わわせる工夫」をしている者は96.3%(26名)おり、ほぼ全ての生徒が工夫することができていた。これらは、相手が変わったことを意識した変更であると捉えることができる。

表3 レポート形式と新聞形式の報告文の比較・考察

変更内容	人数	%
伝えたいこと	14	51.9
行事の提示順	10	37.0
出来事の焦点化	8	29.6
臨場感を味わわせる工夫	26	96.3

(イ) 「形式に応じた構成」について

新聞形式は、記事を書く場所や、記事の長さを調整して、重さの度合いを表すことができ、伝えたいことを十分意識して構成することができる。レポート形式では、ほぼ同じ分量で書いていた各行事について、伝えたい思いによって序列を付け、出来事の詳細により、記事の場所や長さを決定させた。自分が伝えたい内容や、相手が知りたいと思われる内容に合わせて、記事の重さの度合いを表しているものを、形式に応じた構成ができていたものと捉えた。

(ウ) 「段落構成」「段落分け」について

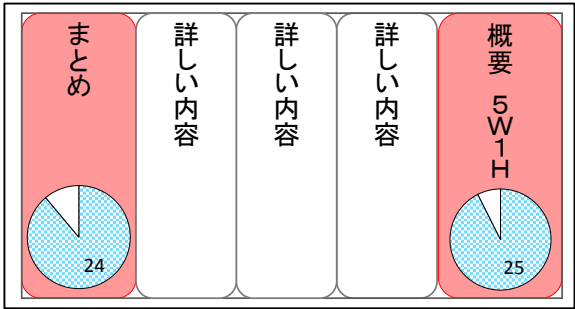
新聞形式の報告文を書かせる際に、1つの記事には1段落目に5W1Hを書くこと、途中は、自分が伝えたい内容ごとに段落を構成すること、最後の段落をまとめの段落とすることを指導した(資料3)。

5W1Hを意識して書いている生徒は25名、まとめを意識して書いている生徒は24名であった(資料3)。全体で見ると、ほとんどの生徒が、記事のどの部分にどのような内容の文章を書くべきかについて、意識できていたと考えられる。

(エ) 意識調査との関連

授業後の意識調査を基に、書き換えた新聞形式の報告文の構成についてまとめた(表4)。

意識調査で「相手を意識した」と回答した



資料3 「段落構成」について

表4 意識調査と報告文の構成の関連

	新聞形式の報告文の構成		
	伝えたいこと	5W1H	まとめ
新聞形式の報告文を書く際に気を付けたこと			
相手を意識した (10名)	7名 (70.0%)	10名 (100.0%)	10名 (100.0%)
形式を意識した (6名)	3名 (50.0%)	5名 (83.3%)	6名 (100.0%)
表記を意識した (9名)	4名 (44.4%)	8名 (88.9%)	8名 (88.9%)
無回答 (2名)	0名 (0.0%)	2名 (100.0%)	1名 (50.0%)

10名は、新聞を通して伝えたいことを変更した生徒の割合が高く、全ての生徒が5W1Hとまとめを書くことができた。また、「形式を意識した」と回答した6名も、新聞を通して伝えたいことを変更した割合が比較的高く、5W1Hやまとめについても、ほとんどの生徒が書くことができていた。

同じ材料を使って、レポート形式から新聞形式に書き換える場を仕組んだことにより、相手や形式に応じた構成についての生徒の意識が高まり、「段落構成」や「段落分け」についても意識できたと考える。

以上のことから、形式を変えて報告文を書き換えさせることは、相手に効果的に伝わる構成についての意識を高めることにつながった。

イ 【検証の視点Ⅱ】「学び合いシート」を用いて、清書前に意見交流をすることにより、新聞の構成について再考し、相手に効果的に伝わる紙面を作ることができたか

意見交流には、「見出しシート」を用いた(資料4)。これは、「新聞を通して伝えたいこと」と「記事の見出し案」を書き、新聞全体の構成を考えるものである。記事の内容は11月に生徒が書いたレポート形式の報告文を用いて、記事の中心となる出来事に赤線を引くことで示すこととした。「見出しシート」とレポート形式の報告文を用い、記事の構成についての意見交流を行った。意見交流には「学び合いシート」を用いた。「学び合いシート」に、「どのような意見が書かれたか」ということと、「意見がどのように生かされたか」ということについて分析を行い、相手に効果的に伝わる紙面を作るための「学び合いシート」の有効性を検証する。

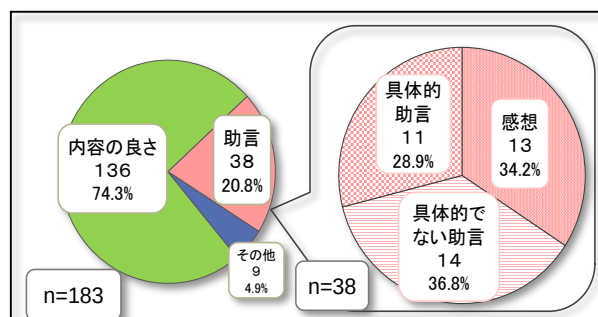
(ア) 「どのような意見が書かれたか」について

「学び合いシート」の記述は全部で183件あった。「見出しが分かりやすかった」、「新聞を通して伝えたいことがよく分かった」など、内容が良かったことを伝えるものは74.3%(136件)、加筆や修正を促すようなものは20.8%(38件)あった。

このうち、加筆や修正を促す38件について詳しく見ていく。「よく分からなかった」といった感想のみは34.2%(13件)、「変えた方がよい」などの具体的でない助言は36.8%(14件)、「どこをどのように変えた方がよい」といった具体的な助言は28.9%(11件)であった(資料5)。

具体的な助言について、抽出生徒Aの記述を見ていくこととする。抽出生徒Aがこれまでに書いた文章を見ると、構成を考えた文章になっている。11月の検証授業の意見交流では、多くの助言を受け自分の構成に生かした。抽出生徒

資料4 「見出しシート」



資料5 「学び合いシート」の記述内訳

Aが意見交流で相手に渡した意見の一部を表にまとめた(資料6)。

抽出生徒Aは、改善点を指摘するだけでなく、変更した方がよいと思う理由を書き、新聞全体の流れを考え、「他学年」や「学年」など、具体的な語句を挙げて、伝えたいことが最も伝わるような見出しにする助言を多く行っている。他の人の構成について助言する活動を通して、構成を変えることに興味をもち、多くの助言を行ったと考える。

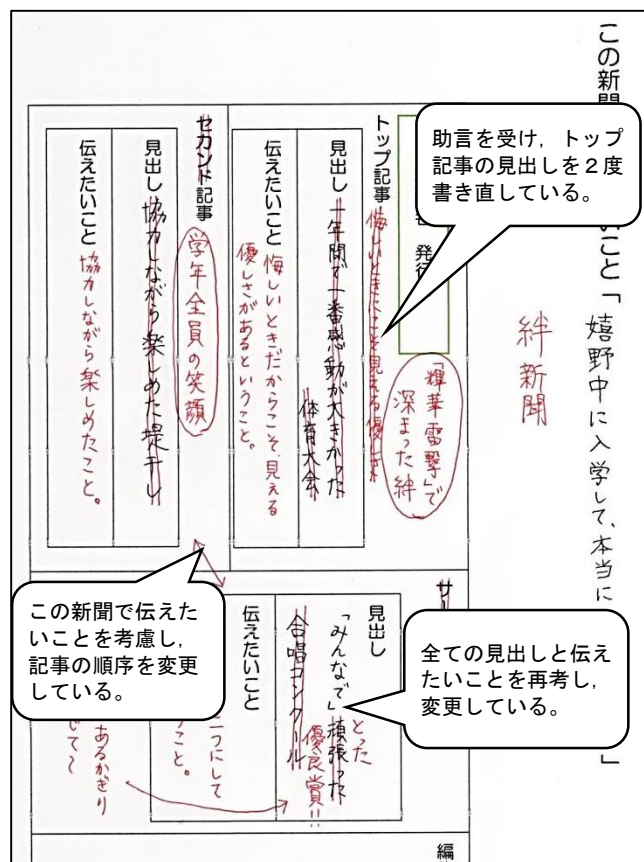
・「嬉しさ＝みんなの努力」より「みんなの努力＝嬉しさ」の方が良いと思う。
・見出しの言葉が、「みんな」や「一生懸命」ばかりで、記事に何が書いてあるのか分かりにくいから、体育大会の見出しには「他学年」か「学年」という言葉を入れたら良いと思う。
・最も伝えたいことに書いてある「絆」という言葉が良いと思った。全ての見出しが「〇〇だった△△△」になっているから、例えば、文化発表会の記事には「優良賞」などの言葉を入れるのはどうだろうか。
・もっと嬉しさを表した方がよいと思うから、体育大会のパンフハリケーンの記事の見出しに、1位になったことを入れた方がよい。

資料6 抽出生徒Aの「学び合いシート」の記述

(4) 「意見がどのように生かされたか」について

意見交流後、構成に加えられた変更についてまとめた。「見出し」は92.6%(25名)と、ほとんどの生徒が変更している。見出しを読んでも記事の内容が分からないという指摘を受けて、言葉を補ったものや、見出しが長くて分かりにくいという指摘を受けて、この新聞を通して伝えたいことを振り返り、要約した生徒がほとんどであった。見出しについては多くの生徒が、記事の内容が分かるようにという意識をもって、意見交流活動に取り組んだと考える。また、その記事で伝えたいことを変更した生徒は4名、新聞全体で伝えたいことを変更した生徒は5名であった。新聞全体のことを考えた助言を得たり、意見交流活動を通して自分で構成について再考したりした結果だと考える。

前出の抽出生徒Aが、意見交流終了後、「見出しシート」に行った書き込みについて見ていく(資料7)。生徒Aは、全ての見出しと伝えたいことについて見直し、変更を加えている。その内の1つ、トップ記事の見出しは、はじめ「一年間で一番感動が大きかった体育大会」としていたが、「どのような感動があったかを伝えた方がよい」という指摘を受け、「悔しい時にこそ見える優しさ」に変更した。さらに、新聞全体を通して絆が深まったことを伝えたいとしており、「読み手が絆を感じられる見出しにしてはどうか」という助言を受け、所属ブロックのテーマを加えて『輝華雷撃』で深まった絆」とした。「学び合いシート」で得た助言を構成の再考に生かしている。また、新聞名を「絆新聞」としたこと、はじめ、行事の行われた順で、2番目に「堤干し」の記事、3番目に文化発表会としていたが、学級全員で心を合わせて歌った合唱コンクールで絆が深まったと感じ、記事の順序を変更した。意見交流を通して、自分自身の文章を見直す目を育てることができたと考える。



資料7 抽出生徒Aの「見出しシート」

このように生徒Aは、構成に着目した「学び合いシート」を用いて、清書前に意見交流することで、構成の視点が定まり、構成について再考することができた。また、他の人の構成を見ることで、自分の構成を見直し、変更を行った。

この意見交流活動は、様々な力をもつ生徒に対応できると考える。例えば、書く力があまりついていない生徒は、助言を得ることで構成を再考することができ、力のある生徒は、他の人の構成について考える中で、自分の構成を振り返ることができるからである。

以上のことから、「学び合いシート」を用いて清書前に意見交流することは、相手に効果的に伝わる紙面を作ることに有効であった。

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

本研究では、一度完成させた報告文を、相手と形式を変更して再構成させた。また、清書前に「学び合いシート」を用いて、構成についての意見交流をさせた。

同じ材料で報告文を再構成することで、相手や形式に応じた構成に対する意識を高め、また、他の人の構成に触れて意見や感想をもつことで、相手や形式に応じて事実や意見を適切に表現する力の育成を目指した。本研究を通して、次のことが明らかになった。

- ・ 相手と形式を変更して報告文を再構成させることは、生徒の構成に対する意識を高めることにつながった。
- ・ 清書前の意見交流の際に、構成に着目した「学び合いシート」を用いることは、構成についての再考を促し、効果的に伝わる構成で報告文を書かせることにつながった。

(2) 今後の課題

- ・ 報告文の構成に関する評価事項の明確化、意見交流活動のチェック項目の統一化
- ・ 中学校3年間を見通した、「書くこと」に関する段階的な指導法、指導計画の作成

《引用文献》

- 1) 文部科学省 『中学校学習指導要領 国語編』 平成20年9月 東洋館出版社 p. 6
- 2) 花田 修一 『「書くこと」の授業改革』 1999年1月 明治図書 p. 17
- 3) 森岡 健二監修 『新版 文章構成法』 1995年12月 東海大学出版会 p. 4

《参考URL》

- ・ 東京書籍 平成24－27年度用 「新しい国語」指導計画例(1年)
<http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/downloadfr1/htm/jkc86878.htm>